

左伝における婦女観(十)

—「妾」について—

尾 崎 保 子

はじめに

前稿では、左伝のなかに記録された嫡と媵の存在について検証した。両者共に嫁ぐ公女に付き添う女性達ではあるが、嫡の場合は基本的には妹が当てられ、姪(兄の子)が当ることもある。また媵は、同姓の他国から送られてくる付き添いである。彼女達は正夫人の付き添いという立場から、

正夫人の配下に置かれる身分として、ひと括りに「妾」の存在で共通する。しかしこれら嫡と媵の事例をみると、例えば「某嫡生某」(誰その嫡が公子誰それを生んだ)という記事が伝文の中に比較的多くみられるのに対して、媵については、経文に「某來媵某」(誰それがやってきて誰その付き添いとなった)と記されて、こちらは国家間の儀礼の執り行なわれたことの記録として記された形となっており、媵が公子を生んだというような個人的記事は殆どみられない。恐らくそのようなことは、公式の記録に記すことが憚られることであつたのであろう。また姪嫡といっても嫡妾という呼称がなされることは比較的少ないが、媵妾という呼称はなされるのが一般的であるところからしても、「妾」の一字が付属している分、正式の

妻ではない存在としての色合いがより濃厚になる。

本稿ではこの「妾」の字を中心にみてゆくが、この呼称は特定の身分階級を表すものというよりは、寧ろ正式ではない妻達全体を指す総称として遣われているようであり、また家の婢をも含む女性達全ての総称ということにもなるようであつて、その概念世界はかなり広汎に亘るように思われる。左伝におけるこの語の事例を挙げてみたい。

一 「妾」の概念規定

「妾」の字は、既に甲骨文の中にみられ、従つてその意味については、先ずここから探ることになるが、甲骨文では「妾」の意味を、一人の女が跪いて頭上に飾りを戴いた象形文字としており、妻以外の配偶者を意味するという。しかしまた女奴を意味し、祭事には家畜とともに生贄として神に捧げられることもあつたとされる。^(注1) こうした甲骨文による記録から、こうした時代に既に妾存在があつて、それが一方では正夫人でないという今日にも通じる意味での存在としてあつたと同時に、他にも家畜と共に生贄に捧げられる被支配者であり、女奴であつたということは、「妾」という

字が発祥時にもつ基本的な意味として興味深い。

ところで、甲骨文字の発見から王国維の「殷周制度論」(『觀堂集林』卷第十)などの研究がなされ、古代殷帝国における政治的社会的制度については、そのありようは飛躍的に解明されたが、そのいうところによると、古代殷・周間における相続制度の相違から来る違い、つまり殷は兄弟相続制であったのに対して、周代は父子相続制となり、結果として、周代以降には嫡子庶子をめぐる厳密な相続規範が生まれ、このことが嫡妻と庶妻の差別をも生むことになったとされる。こうして公室として嫡子相続という宗家体制、いわばピラミッド型の組織による封建体制が確立され、強力な宗家支配体制を生むことになったが、それはまた同時に、公室内における兄弟間の不平等、それにとまうその妻達における不平等を生み、支配する側とされる側における葛藤をも内包することになったというのである。^(注2)

確かにこうした一見シンプルで機能的な宗家による支配組織は、権力の集中という外治においては有効性があっても、例えば春秋時代の魯国の歴代国君の殆どが嫡子ではないという現実をみると、その頂点に君臨するため、それぞれの公室の人間関係に発生した骨肉の争いには凄まじいものがあり、内治には問題があったということになる。そして、その凄まじいエネルギーの中に妾達の存在があったということである。

次に周公旦の撰になり官制職掌に詳しいとされる『周禮』をみてみると、冒頭の天官冢宰第一の条に、女酒、女漿、女饔、女醢、女醢、女醢、女冢等^(注3)の職掌名が挙げられている。鄭注には、例えば女酒の場合は「女酒、女奴^(注3)の職掌名」とされており、他の職名も女奴が担当したことが記されていて、いわば公室内における日常の下働きに女奴が当たっていたことが理解される。注には、これらをまた当時の侍史官婢とも奚官女の類とも記しており、そ

の役割の内容からみるに、主人の子を生むことのある配偶者としての仕事というよりは、寧ろ家内労働者としての下働きの婢ということであったかと思われる。ここには更に後に続けて、九嬪、世婦、女御、女祝、女史、典婦(典婦功)等の名称がみえており、九嬪・世婦・女御は王の側に侍る者達であるが、女祝は主に王后の内祭を掌る役職であり、女史は王后の礼職を掌ったとされる。また典婦は女功のことを掌るという疏の記述があるところから、これらの女性達は先の女性達の職域とは違った、もう少し上級な仕事に携わったといつてよいのではないかと考えられる。更にこの後に、内司服に女御二人また縫人に女御八人、女工八十人という記述もあるところからみると、女奴が細分化されたかなり広汎な役割担当をしていたことが知られるのである。

ところで、左伝には妾の身分についての記述が必ずしも詳細ではないが、周末秦・漢時代の礼に関する理論と実践の書とされる『禮記』には、より具体的な記述がなされている。この書を左伝の時代を経て、戦国時代に晒され、やがて統一王朝による統制の腐心に採られた挙句の一書と考えると、いうまでもなく、左伝の時代をそのままに伝えるものではないかもしれないが(作者の特定はここでは措く)、しかし時代を超えて残った因習や感覚というものもない訳ではあるまい。そこで左伝の面影を窺うという意味において、これを参照しておきたい。

「妾」に関しては、『禮記』のなかでも曲礼・内則・喪服小記・雜記上・喪大記・坊記等にこれについての言及があるが、例えば曲礼下第二には次のように記されている。「天子有后、有夫人、有世婦、有嬪、有妻、有妾」と、つまり天子には后・夫人・世婦・嬪・妻がいるが、更にその下に、妾という公室の家内にいる女性の中で最低の階層に属する女性がいるという

ことになる。ここでの妾は公室内の下働きの女性達を特定しているのである。また「取妻不取同姓。故買妾不知其姓、則卜之。」(曲礼上第一、また坊記第三十にも同主旨の記述がある)と述べて、妻を娶るのには同姓を避け、妾を買う場合にその姓が分からなければ占卜で決めるとする。ここでは妾が、正妻に対して正妻ではない妻としての字義をもち、しかもこれら妾の中には、金銭で買われてきた者のいたことが分かる。また更に「天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人、士曰婦人、庶人曰妻。公侯有夫人、有世婦、有妻、有妾。夫人自稱於天子曰老婦、自稱於諸侯曰寡小君、自稱於其君曰小童。自世婦以下自稱曰婢子。」(曲礼下第二)と記して、それぞれの身分における妻達の呼称と自称について記しているが、これらを見るに、世婦、つまり正夫人の実家から付き従ってきた身分の女性以下は、総て自らを婢子と称するとしている。ここにおける「婢」とは、具体的な身分を表すということと同時に、自己謙遜をも表す意味での語であったということではなからうか。最低の身分を表す「妾」の語は「婢」と同じ意味をもちながら、一人称を意味するようになるが、しかし「嬖」にはそうした経緯は認められない。

ところで、後漢、許慎の『説文解字』には、「妾、有皐女子、給事之、得接於君者、从平女、春秋傳云、女爲人妾、妾不娉也。」(第三篇上)と記して、妾は女奴隷で主君に直接仕えることのできる者をいい、左伝を引いて、正式に娶られた存在ではないとしている。ここにいう皐とは、段注によれば「犯法也」としており、そのままに訳せば罪を犯した者という意味になるが、この妾の字は説文の中では女部に入らずに、辛部に入れられており、これが罪人という意味をもち、更にまた、寧ろこうした意味の方に重点を置いてみると、基本的には許慎の資料としての金文の

記録に、甲骨文から繋がるそうした傾向があったということであろう。それにしても、後には妾は専ら正式ではない妻の意味として限定的に遣われることが多いが、古代、この字の基本的な概念の中に、女の犯罪者としての要素があったということは何を意味するのであろうか。どのような罪を犯して罰せられることになったのであろうか。

こうした問題について、ここで考えられるのは、国家間における戦争の折に、敗戦国の女達が戦勝国の捕虜になるということがあがるが、それがここにいる犯罪の範疇に入るのではなからうか。左伝の中には次のような記事がみられる。襄公二十五年、晋が齊を討ったとき、齊では男と女を別々に分けて縄で縛り、使用人として差し出した(男女以班)と記し、(注6)哀公元年、楚が蔡を討った折には、蔡の人は男と女を別に分けて投降した(蔡人男女以辨)と記す。また哀公十三年、女奴隷を得るために戦争をしようとした呉の国の事例(王欲伐宋、殺其丈夫而囚其婦人)もあり、また更にこの場合は奴隷を求めてではないが、莊公十四年には、息国の王后息嬀の美貌に魅了されて、これを得るために侵略した楚子の事例などがあって、まさに「春秋に義戦なし」と称された大義なき国家間の争いの中で、敗戦国の捕虜を労働力として獲得することは慣例的にあったようである。恐らくこうした中に捕虜となったものが、いわば罪人と見做され、奴隷として使役されたということになろう。

更にまたここで、先の『周禮』の注記に載せられた女奴についてもみておきたいが、先に挙げた説文の妾についての注には、「女部曰奴・婢、皆古之皐人也。」として、「奴」「婢」ともにこれらが罪人を意味するものとしての認識が記されている。また後に挙げる左伝の中の妾とともに比較的多く遣われている「嬖」の字にも、便の本字が当てられて「便嬖」とされ

ており、「玉篇作使僻也。廣韵曰愛也。卑也。妾也。」と説く。愛される存在でありながら卑賤であり、妾であると説明されているのであるが、こうした一連の語についての説文の説くところを要括すれば、妾の語が基本的にもつ意味は、ひとつは罪人としての身分を表すものであり、またふたつには主人に隷属し、しかも主人に愛される者、つまり側妾であるということになる。こうした存在規定はまさに後の女妾のそれと共通する。妾は正夫人を脅かすゆえに厄介な存在ではあるが、その性的存在としての魅惑の側面も然りながら、この存在が古代から本質的にもっている奴としての意味するところ、つまり敵国の遺民であると考えた場合、そこには更に不気味な厄介さが浮かんでくる。

左伝全体の傾向は、そもそもこの書が礼について教導する意図をもつものとされており、そうした趣旨から当然のことながら、夏姫の淫乱や驪姫による晋国の内訌を戒めとして語っており、妾存在の危険性を警告している。しかし一方では、この制度を擁護する傾向もあって、『易經』の一文には、「初六。鼎顛趾。利出否。得妾以其子。无咎。」（下経 鼎）と記すが、これは、陰柔居下、鼎が逆さまになって足が上になった象であるという。常道に反するようでありながら結果は悪くないということを表し、つまり男が夫人以外の配偶者をもつことは道徳に反するようでありながら、その実血統を繋ぐ後継者を得ることができるといふ利点があり、こうした意味において、これは罪ではないというのである。まさにここに妾制度の本音が語られているといえよう。年を経て極近年までこの慣習が牢固として存在したのは、祖先祭祀を最優先してきた漢民族の根源的な考え方に依拠するものといえるのではなからうか。

二 左伝の事例「嬖」について

左伝には、「妾」の語そのものを使った記述は決して多くない。しかし、そうした存在について窺わせるいくつかの共通した語のあることを指摘できる。それらの語で比較的頻繁に使われているのは「嬖」と「寵」の語である。ひとつの事例の中にこれらふたつの語が併用されている場合もあり、また「寵」の場合は男子の場合もよく遣われている。そこで、ここでは女子により多く遣われている「嬖」についてみておきたい。

左伝初頭の隠公の時代に、次のような伝文がある。

1 衛莊公娶于齊東宮得臣之妹、曰莊姜。美而無子。衛人所爲賦碩人也。又娶于陳、曰厲嬀。生孝伯。早死。其娣戴嬀生桓公。莊姜以爲己子。

公子州吁、嬖人之子也。有寵而好兵。公弗禁。莊姜惡之。（隠 三）

齊から衛の莊公夫人として嫁いだ莊姜は、美貌であったが子が無く、夫に疎んじられた。『詩經』の「碩人」は、衛の国の人を哀れんで作ったものといわれる。^{（注7）} 莊公は改めて陳から厲嬀を娶り、公子孝伯が生まれたが早く死に、その妹とともに嫁いで来た戴嬀が公子（後の桓公）を生んだために、莊姜はこれを吾が子として育てた。ところが州吁という公子がいた。莊公の愛妾の子であり、公から寵愛されていたが、州吁はそのことで傲慢になり、莊姜はこれを憎んだ。やがて州吁は継嗣桓公を殺害してしまう。そこでお家の大事を憂えた大夫の石碏が、州吁ともども親しかった吾が子をも殺して主家の安泰を守ろうとする。ここである「嬖人」は名を記されず、夫人以外の愛妾の一人ということになる。『史記』では「莊公有寵妾、生子州吁」（衛康叔世家第七）と記されて、「妾」の字が明記されている。

2 初、王姚嬖于莊王、生子頹。子頹有寵。爲國爲之師。(莊 十九)

莊王のそばめの王姚という者が王に寵愛されて子頹を生んだ。子頹は莊王から愛され、爲國がその師傅となった。ここにいう「嬖」は動詞である。杜注に「王姚、莊王之妾也。姚姓也。」と記されており、姓名と身分が明らかにされている。先の例1が「嬖人」のみの記録であってその名を記さないのと比べて顕著な違いをみせている。貴妾に属する人物と考えられる。

3 太子將戰。狐突諫曰、不可。昔、辛伯諗周桓公云、内寵竝后、外寵

二政、嬖子配適、大都耦國、亂之本也。周公弗從、故及於難。今、

亂本成矣。(閔 二)

晋の国の内訌に關しての記事である。嫡子申生は、父君の命令を受けて、戦死覚悟の戦いに臨もうとしていた。これに対し、家臣の狐突がこれを諫めて、その昔、周の大夫辛伯が周の桓王に諫言して、寵妾が王后に並ぶ寵愛を受け、寵臣が正卿と並んで政治を壟断し、庶子が嫡子同然に振る舞い、地方都市が国都と同じ勢力をもつというのは、国の乱れる本であると忠告したことを話し、申生の場合も、敢えて戦死したりすることなく、寧ろ生きて晋国を治めることの方が肝要であると諭した。杜注には「驪姫爲内寵。二五爲外寵。奚齊爲嬖子。曲沃爲大都。故曰、亂本成矣。」と記しており、晋国の場合、驪姫が献公の寵愛を受け、二五が臣として寵愛され、庶子である奚齊が子として最も寵愛を受け、その奚齊の住む曲沃が首都を差し置いて大都市になってしまった。ために国家の秩序が崩壊し、乱の起る気配があるというのである。つまり献公が不明で、嫡子を廢除して寵愛する驪姫の子奚齊を継嗣としようとしたことによって、晋の長年に亘る内訌が始まるのであるが、ここにいう「嬖子」は寵妾の子というほどの意味である。

4 齊侯之夫人三。王姬、徐嬴、蔡姬、皆無子。齊侯好内、多内寵。内

嬖如夫人者六人。長衛姬生武孟、少衛姬生惠公、鄭姬生孝公、葛嬴生昭公、密姬生懿公、宋華子生公子雍。公與管仲屬孝公於宋襄公、以爲太子。雍巫有寵於衛恭姬。因寺人貂以薦羞於公。亦有寵。公許之立武孟。管仲卒、五公子皆求立。冬、十月乙亥、齊桓公卒。易牙入、與寺人貂因内寵以殺羣吏、而立公子無虧。孝公奔宋。十二月乙亥赴、辛巳夜殯。(傳 十七)

齊の桓公は夫人が三人あったが、これらに子が無く、また女色を好んだところから、夫人同然の寵妾が六人もいて、しかもそれぞれに子がいた。桓公は臣の管仲に諮って孝公を太子にと決めてあったが、管仲が没すると、他の五子も継嗣となることを要求し、桓公が死ぬと、内寵の長衛姫が寺人(宦官)と結託して、反対した大夫達を殺して、自身の子武孟を立てた。そこで異腹の孝公は宋に逃れた。齊桓と称されて、明君の誉れの高い人物であった桓公も、色好みから内室が多く、いわばこうした多子多妻ゆえに、没後、後継者争いで国難を招くことになったのである。この後、国君は孝公、昭公、懿公、惠公と続くが、いずれも先述の桓公の寵妾たちそれぞれが生んだ公子たちであった。この内寵達及びこれを取り巻く者達が、それぞれの自己主張をしたところから後継者が決まらず、桓公の遺体はそのままに放置されて、死後六十七日目にしつと納棺されるという始末であったと伝えられる。ところで、ここには「内嬖」と共に「内寵」の表現がなされているが、いわば国君という外治者としての冷静な判断について、内治者としての彼自身のもつ人間として、男としての感情が、とかくそれを惑わせるという事実の怖さを物語っている。寵妾の存在が国家にとって如何に厄介なものであったかということを知る例である。

5 今、嬖寵之喪、不敢擇位、而數於守適。唯懼獲戾。豈敢憚煩。少姜

有寵而死、齊必繼室。今茲、吾又將來賓。不唯此行也。(昭 三)

鄭の卿游吉は晋の平公の寵愛した夫人少姜の葬儀に参列したが、その手厚い礼儀に驚く晋の大夫に対していうのである。「わが小国鄭は大国晋に対して恭順しており、縦しんば亡くなった方が正夫人でなくとも平公の寵愛された方の葬儀であれば、丁寧すぎる程の礼儀を尽くしてまでも恭順の意を表したい。少姜は寵愛されて亡くなったと聞いているので、いずれその里方の斉から後継ぎが送られてくるはずで、私は今年中にはまた婚禮の祝賀にやってくることになるであろう。」と。この伝文の先に、晋の文公・

襄公名君二公の時代には、夫人が亡くなった場合は、土に弔問させ、大夫に会葬させて、諸侯の守るべき礼儀を明確に定めて揺るがなかったと懐かしみ、しかし今は、国君の機嫌を恐れて、その愛妾の葬儀に他国の卿が会葬しなければならぬような礼の正しからざる、不安定な時代になってしまったということを慨嘆しているのである。ここでの「嬖寵」とは、斉出身の亡くなった少姜を指すが、里方の斉では、自国出身の少姜が大国晋の国君に寵愛されたことで両国家間の関係がうまくいったことから、やがて再び後添いを送っている。^(注11)その時「妾」という語は遣わず、斉の景公の申し入れには「嬪嬙」といつている。鄭の卿の感想は的を得ていたということになるのである。

ところで、左伝の襄公・昭公の時代から大国小国論が論じられることが多くなって、周王朝を核とした祖先祭祀の時代から実力主義時代へと変貌してゆく国際関係が微妙に窺われるが、小国斉にとって、大国晋の国君平公に愛された少姜の存在が、両国関係の紐帯として如何に重要な意味をもっていたかということが分かる。こうした事例は、例えば哀公八年の

^(注12)記事にもみられる。つまり斉の悼公が魯の季姫と婚約していた。しかし季姫は叔父と通じてしまい、そのことで季姫側が婚約を破棄したところ、立腹した悼公は夏に魯の讎と闘を攻め取ってしまった。しかし、同年の冬にはこれらの地を返還してきた。嫁いだ季姫が寵愛されたためであったという。このように嫡夫人であれそれ以外の妻であれ、送り届けた一人の女性が国君の寵愛を受けさえすれば、外交上の価値は測り知れないものがあつたのである。

6 衛襄公夫人姜氏無子。嬖人嬖始生孟縶。(略) 嬖始生子。名之曰元。

(略) 二卦皆云。子其建之。康叔命之、二卦告之。筮襲於夢、武王所
用也。弗從何爲。弱足者居。侯主社稷、臨祭祀、奉民人、事鬼神、
從會朝。又焉得居。各以所利、不亦可乎。故孔成子立靈公。十二月
癸亥、葬衛襄公。(昭 七)

衛の襄公の夫人には子が無かった。寵愛する嬖始が孟縶を生んだ。この子は足が不自由であった。大臣の孔成子が夢のお告げで、衛の先祖の康叔から、元を後継とせよと命じられており、一方、臣の史朝もまた同じ夢告げを受けていた。やがてこの愛妾が次子を生み、元と命名されたが、孔成子と史朝は嫡子の存在と夢告げの間で悩み、次の結論に達するのである。

つまり、国君たる者は国を統治し、祖先を祭祀し、人民を保護し、鬼神を敬い、天子に朝見し、諸侯の会盟を行なうものである。家に籠ったままではその任務を遂行することはできず、それでは国君としての任には当れない。やはりそれぞれの身に叶った任に当るのがよろしいとして、次子元を靈公に立てた。ここには、正夫人の嫡子による相続が不可能であること、長子に身体上の問題があること、国君の任務の厳しさ等の理由から、それには相応しい人物を選ぶ必要があるとして、現実的な選択がなされた経緯

が語られているが、未生の子の夢告げの話などは、あるいは長子の不具合に危機感を募らせて作った虚言であつたかと思われる。ここにいう「嬖人」媼始は、名も記されているところから、貴妾に属する人物と思われるが、正夫人に子が無く、また他の寵妾というライバルもなく、生んだ子が正當な国君の継承者に立てられた幸運な寵妾のことである。ところで次の事例はかなり悲惨である。

7 陳哀公元妃鄭姬、生悼太子偃師、二妃生公子留、下妃生公子勝。二

妃嬖、留有寵。屬諸司徒招與公子過。哀公有癢疾。三月甲申、公子

招・公子過、殺悼太子偃師、而立公子留。夏、四月辛亥、哀公縊。

干徵師赴于楚、且告有立君。公子勝愬之于楚。楚人執而殺之。公子

留奔鄭。書曰陳侯之弟招殺陳世子偃師、罪在招也。楚人執陳行人干

徵師殺之、罪不在行人也。(昭 八)

陳の哀公の正夫人及び他の二人の妃達にもそれぞれに公子が生まれた。

哀公は第二夫人を特に愛し、その子留を二人の弟に頼んだ。二人の弟は嫡子の悼太子を殺してこれを立てた。間もなく不治の病に罹っていた哀公が縊死した。陳の大夫干徵師が楚に赴いて喪を告げ、また新君留の即位を告げた。しかし第三夫人の子勝は事の真相を楚に訴えたので、楚では干徵師を殺してしまい、公子留は鄭に出奔した。この年の経文に陳侯の弟招が陳の継嗣を殺した等の記事があるが、これに対し伝文は、罪が招にあることをいっているであり、また成敗された干徵師に対して特に行人と冠しているのは、この人物には罪がないことを明記するためだという。ここでは第二夫人が殊に「嬖」せられたと記している。陳の内訌は哀公の第二夫人への偏愛から始まったということになるが、この場合、正夫人は名を記し、他の二人は妃とのみ記している。事例4が正夫人三人と内嬖六人を総て記

名しているのと対照的である。二妃の出自が卑賤であつたということであろう。

以上、「嬖」の事例を挙げたが、他にも襄公二十五年に、魯の叔孫僑如が斉にいた時、その娘が斉の靈公の寵愛を得て、景公を生んだと記された所で、嬖せられたと述べている。

三 妾について

先にも述べたが左伝の中における「妾」の字の使用は必ずしも多くなく、しかも「娣」や「媵」のように限定的な意味をもつものではない。先にそうしたこの字のもつ広汎な字義について触れておいたが、以下に事例をみてみたい。

8 惠公之在梁也、梁伯妻之。梁嬴孕過期。卜招父與其子卜之。其子曰、

將生一男一女。招曰、然。男爲人臣、女爲人妾。故名男曰圉、女曰

妾。及子圉西質秦、妾爲宦女焉。(僖 十七)

晋の惠公が梁に逃れていた時に、梁伯がこれに公女を娶わせた。懐妊した公女は時期を過ぎても出産の兆候が無く、そこで卜人招父親子に占ってもらったところ、一男一女が生まれ、男子は人の臣となり、女子は人に仕える妾になるであろうといわれた。そこで男子を圉と、女子を妾と名付けた。後に晋が秦に韓原の戦いで破れ、子圉が秦国の人質となるに及んで、公女である妾は秦の女官として仕えたのである。ところでここにおける妾は人名である。公女に妾と命名するということは恐らく稀なことで、説文の段注にも妾に纏わる事例として引用されているが、左伝の杜注には「圉養馬者。不聘曰妾。」と、圉は馬飼ひ人であり、妾は正式に迎えられた訳

ではない配偶者をいうのだとする。孔疏には妾について、礼記内則にいう「聘則爲妻、奔則爲妾。」を引用して、つまり礼をもって迎えられれば正式の妻ということになるが、そうでなければ妾となるのであると説く。妾を正妻に対蹠させているのであり、ここでは恵公の公女が正妻に迎えられなかったことを意味する。後の晋の文公を評価し、恵公を批判する観点から、こうした恵公のその不徳が子達に及んだ構図によって、一種因果応報的教訓を意図しているものであろう。妾は不幸の象徴として利用されているということになる。

9 初、魏武子有嬖妾、無子。武子疾。命嬖曰、必嫁是。疾病則曰、必以爲殉。及卒、嬖嫁之。曰、疾病則亂。吾從其治也。及輔氏之役、

嬖見老人結草以亢杜回。杜回躡而顛。故獲之。夜夢之。曰、余而所嫁婦人之父也。爾用先人之治命。余是以報。(宣 十五)

これは殉死に纏わる話である。晋の景公の家臣魏嬖が秦軍を輔氏で破り、力士の杜回を捕捉して、手柄を立てた時の逸話である。父の魏武子には愛妾があったが、子が無かった。病気になる、嬖に遺言して、自分亡き後は愛妾を再嫁させるようにと命じた。ところがいよいよ危篤状態になると、今度はこれを殉死させるようにといひ直した。しかし父の死後、嬖はこの愛妾を再嫁させてしまい、敢えて父の遺言に違背したことを、父の正気の時の命令に従った迄のことだといった。その後、輔氏の戦いの折、一人の老人が戦場の草を結んで敵の躡くようにし、嬖に杜回捕捉の手柄を立てさせたが、その夜、夢にこの老人が現れて、自分は殉死から救われた愛妾の父親だと名乗り、娘を救ってくれたことへの恩に報いるために草を結んだのだといったという。この場合の愛妾は、公室における貴妾とは違って、当然ながら名も記されていない。こうした話は他にも『禮記』にこれとよ

く似た陳乾昔の二婢の殉死に関する話があるが、そこには「婢子」という表現が使われているところからみても、この場合の妾は、正妻にあらざる配偶者というよりは、寧ろ若い下女に近い存在であり、二女共嫁の伝統を踏襲した話ではないかと思われる。

10 聲伯之母不聘。穆姜曰、吾不以妾爲姒。生聲伯而出之。嫁於齊管于

奚、生二子而寡、以歸聲伯。(成 十二)

魯の宣公の弟叔肝の子である公孫嬰齊、つまり声伯の母についての記述である。声伯の母は、兄嫁に当る宣公夫人穆姜から、正式な婚礼で迎えられなかったという^(注15)ことで軽んじられ、弟嫁とは呼ばないと宣言されて、声伯を生んだ後に公室を追ひ出されてしまった。その後、齊の国の管于奚に嫁いで二人の子を生んだが、主人が亡くなって寡婦となり、結局わが子声伯のもとに身を寄せた。ここでの声伯の母が呼ばれた「妾」は「不聘」ゆえに蔑まれたのである。先に検証したところでも、妾の身分は、女奴隸、犯罪者、売買の対象、私奔(礼をもって迎えられたのではなく嫁ぐ)等の意味が考えられるが、声伯の母の出自については記述はない。彼女は公室を追われて後、再婚しており、またそこで生んだ娘は、兄声伯の都合によって二度も結婚させられている。こうした経緯から推すに、息子声伯もまたこの母への礼儀に対して無頓着であったのではないかと思われる。国君の正夫人としての格式を誇る穆姜の仕打ちは過酷におもわれるが、正夫人の地位はそれほど權威のあったものであり、正式でない結婚は軽んじられたということになる。孔疏には、穆姜が「吾不以妾爲姒。」といった個所について詳述がなされており、本来は声伯の母は娣(弟嫁)と呼ばれるべき立場であるが、伝文に似(兄嫁)と記していることの矛盾を指摘する。^(注16)

11 季文子卒。大夫入斂。公在位。宰庀家器爲葬備。無衣帛之妾、無食

粟之馬、無藏金玉、無重器備。君子是以知季文子之忠於公室也。相三君矣。而無私積。可不謂忠乎。(襄五)

魯の上卿季文(季孫行父)が亡くなった。大夫達は季文子の家に行き、納棺の儀式を執り行ない、襄公も参列された。季文子の家の家老が葬儀の準備をしたが、絹物の衣装を身に纏っている女は居らず、穀物を食む馬とて無く、金玉を蔵しているようでもなく、家財道具で余分な物などなにもなかった。君子はこうした状況を見て、季文子が宣公・成公・襄公三代の国君に仕えながら、何の蓄財もないことについて公室への忠義一筋に生きただためであると感嘆した。三代の宰相職を勤めたという立場から推測すれば愛妾がいてもおかしくはないが、ここでの妾は、寧ろ下働きをも含めた家内の女性達の総称を意味するものと思われる。また、家畜の馬と対称されており、この点当時の妾への認識を窺わせているといえよう。また更にこうした記事は、季文子の人物の清廉さを評価するものである。(左伝の伝文中にも外交関係の中に活躍する人物としてよくその名が登場する。)ただ、晩年の襄公二年の伝文中には、襄公の母齊姜が亡くなった時、姑に当る穆姜の準備していた棺を横取りして用いさせたことで、君子達から非難されたという件があるが、穆姜へのかねての恨みからのなせる業とされており、また伝文中に彼を誘って「季孫於是爲不哲矣。」と記している。つまり、季孫はここにおいて愚者という以外にないと断じているのである。しかしこうした言い方は、寧ろ逆にそれまでの彼が高く評される人物であったということを踏まえた表現といえるものであらう。また更に襄公四年、襄公の生母定姒の死に際しても、正夫人ではなかったということで、葬儀を簡略に行なおうとして大工の長の匠慶からも非難され、君子達からも他に對して無礼を働いたとして非難されている。^(注18)こうした吝嗇ぶりは、小国の家

老として長年心を悩ましてきた老人が、人生を賭けて削ぎ落としていったものは物欲であったということを示しているのであらうが、質素なこの人物にとって、妾という存在は贅沢以外の何ものでもなく、後の事例15にみるような内寵達の驕奢など、論外であったということになるといえよう。

12 靈王求后于齊。齊侯問對於晏桓子。桓子對曰、先王之禮辭有之。天子求后於諸侯、諸侯對曰、夫婦所生若而人。妾婦之子若而人。無女而有姊妹及姑姊妹、則曰、先守某公之遺女若而人。齊侯許焉。王使陰里逆之。(襄十二)

周の靈王が王后を齊の国に求めた折、齊侯が返答の仕方を晏桓子に問うと、礼に叶った対応について、桓子は次のように答えた。諸侯が対応するのには、私ども夫婦の生んだ誰々とか、妾腹の子の誰々といい、娘がなくて自分の姉妹やおばに当る者をいう場合は、先代公の遺された娘のこれこれの者という風に申し上げるのだといった。そこで齊侯は承諾し、靈王は大夫に命じて婚礼の仕度をさせた。ここでは妾という語が王に対する公的な返答の中で遣われている。憚るべきことばという訳でもなかったようである。こうした答え方は次の事例にも共通したところが窺われる。

13 初、宋内司徒生女子。赤而毛。棄諸堤下。共姬之妻取以入。名之曰棄。長而美。平公入夕。共姬與之食。公見棄也、而視之尤。姬納諸御。嬖、生佐。(襄二十六)

宋の大夫内司徒に女子が生まれたが、体が赤く毛が生えていたところから、これを捨て子した。ところが宋の平公の母共姬の侍女に拾われて、棄と名付けられた。やがて棄は美しく成長し、共姬の食事の席で平王に見初められ、気に入られて佐(後の元公)を生んだ。ここでの妾は、国君の母君にお仕えする侍女を指しているが、厳密な意味での職掌の特定はない。

またこの逸話の後には、棄が平公夫人となつて後に、家臣の左師に対して

自らを「君之妾棄」と、つまり国君のそばの棄ですと名乗って左師を恐縮させている。娣や媵に関するこうした逸話はなく、恐らくここでの用法は、妾の卑しい身分という程の謙遜語として遣われた一人称であろう。この女性の謙遜語としての妾に関しては、この事例の先の襄公二十三年にも孟姜女伝説の淵源として知られる齊の杞梁の妻の逸話^(注19)があつて、戦死した夫の喪を迎えた妻が、主君である齊侯の郊外での弔問に対して、「下妾不得與郊弔。」すなわち夫は大夫として戦死したのであり、郊外での弔問を受けるいわれはないと応じて、その不名誉な扱いを詰つたというものである。ここでの下妾は、妻が自身を謙遜した言い回しである。妾の一人称としての事例ということになる。

14 僞又聞之、内官不及同姓。其生不殖、美先盡矣、則相生疾。君子是以惡之。故志曰、買妾、不知其姓則卜之。違此二者、古之所慎也。

男女辨姓、禮之司也。今、君内實有四姬焉。其無乃是也乎。若由是二者、弗可爲也已。四姬有省猶可。無則必生疾矣。(昭 二)

晉侯(平公)が病氣になり、鄭の簡公は子産を見舞いに遣わした。子産は平公に晋の歴史を踏まえながら身を慎むことの大事を説いたが、また過度の女色を戒めて、同姓の女官をおそばに置かないようにと勧め、古い書物には、妾を求めるにはその姓が分明しなければ卜に掛けて決定するという程であるのに、今、国君は同じ姬姓の女官が四人もいる。これを除かないことが君主の病氣の原因に違いないのである。ここでの「買妾」^(注20)は平公の色欲の対象としての女官達ということになる。

15 宮室日更、淫樂不違、内寵之妾、肆奪於市、外寵之臣、僭令於鄙、私欲養求、不給則應。民人苦病、夫婦皆詛。祝有益也、詛亦有損。

(昭 二十)

齊の景公が皮膚病に罹り、諸侯からの使者が見舞いにきたが、そうした者達の中で、病氣の原因を神主の祈りの不足ではないかという者がいて、景公は神主の処罰をしようと考えた。これに対して、晏子が諫めて言った、中に右の文言があるのである。つまり、病氣は神主の祈りの結果ではなく、宮室の腐敗の現状からきているものだという。宮殿を日々に造り変え、淫樂は続き、奥の君主お気に入りの女達は市から品物を縦に奪い取り、朝廷の寵臣たちは君命を偽って各地に命じて品物を要求し、応じなければ罰するという横暴さである。人民は疲弊し、身分の低い男も女もお上を呪っている。そんなところでたとえ神主が祈つたとしても、その祈りより強く人民がお上を呪っている以上、祈りの効果は期待できるものではないというのである。ここにいう「内寵之妾」は「外寵之臣」と対称的に遣われているが、君主の側にいて君主を墮落させる女達として戒められるべき存在であるとの批判的意図が付与されているものと思われる。

終わりに

以上、「妾」という存在について左伝の記事を挙げてみた。左伝の基本姿勢として、女性に関することは記さないのが通常であることに加え、この語義の非公式性ゆえに、こうした記録は少なく、ためにこれに準じると思われる「嬖」「寵」の語についても挙げてみた。しかし「寵」はいわゆる「内寵・外寵」と対称的に遣われるように、女性のみに限定されて遣われる訳ではない。そこでこれを省いた。厳密に言えば「嬖」も男性に関して遣われることもあるが、しかしこちらはとも女性の多いよう

ある。

さてこれら事例を統計的に総括することが可能であるかというところ、かなり難しい。作者がこれらの表現を厳密に遣い分けたという形跡はないに等しい。従って、事例の羅列に終始した観があるが、ただ、ここに本稿の検証の結果として、それは必ずしも新たな発見という訳ではないが、ひとつ挙げておきたいのは、「嬖」や「寵」と違って、「妾」字そのもののもつ運命である。これが一人称で遣われたということである。先ずは女奴が自己の身分を一人称として名乗ることから始まったかもしれないが、これがやがて自己謙遜の意味合いで遣われるようになったということは、後の女性一般の自称の慣習へと続くものであった。

ところで妾存在は女奴から始まったということではないかと考える。初めに正妻にあらざる妻として家族制度の中に組み込まれていたということではないように思われる。妾にすべく戦勝して奴を獲得したということもあるかもしれないが、義戦なき春秋時代にあつて、寧ろ敗戦国の女達が捕虜となって後に女奴とされ、中に、妾とされた者もいたということであり、このことはまた子孫を生み継ぐという祖先祭祀を重要視する慣習からも温存されて、この辺りから妾制が定着していったということではなからうかと思うのである。

(引用 十三經注疏 左傳 藝文印書館 古字・俗字は正字に直した)

注1、馬如森著『殷墟甲骨文引論』によると「從女、從、象形字、像一跪坐之女人頭上有髮飾形。本義是戴有髮飾的女人、妻之外配偶。」として以下に説文を引き、段玉裁注の左伝の事例(僖公十七年)が載せられている。また卜辞の意義については、ひとつは配偶者を表す詞である(一、表示配偶之詞)と

して、ふたつには女奴隷を祭りの生贄とする(二、用作女奴爲祭牲)という意味にとっている。

注2、貝塚茂樹著『古代殷周帝国』1竜骨の秘密(一九五七 みすず書房) 参照。

注3、鄭注によれば、「女酒、女奴醢醢者。」「女漿、女奴醢醢者。」「女饔、女奴之醢醢者。」「女醢、女奴醢醢者。」「女醢、女奴醢醢者。」「女醢、女奴醢醢者。」「女醢、女奴醢醢者。」と解する。

注4、鄭注に「嬖婦也。昏義曰、古者天子后立六宮、三夫人、九嬖、二十七世婦、八十一御妻、以聽天下之內治、以明章婦順、故天下內和而家理。」

注5、「辛、皐也。」下に段注に「女部曰、奴・婢皆古之皐人也。僂周禮、其奴、男子入于皐隸、女子入于春皐。」という。

注6、襄公二十五年、「男女以班、賂晉侯以宋器樂器、自六正・五吏・三十帥・三軍之大夫・百官之正長・師旅及處守者、皆有賂。晉侯許之。使叔向告於諸侯。公使子服惠伯對曰、君舍有罪、以靖小國、君之惠也。寡君聞命矣。」と、ここでは敗戦国齊を有罪と記している。また「男女以班」は男女が奴隷として差し出されたものと考えられる。

注7、「詩經」には他にも莊姜に関する詩として「綠衣」「燕燕」「日月」「終風」なども挙げる説がある。

注8、桓公十八年に次のような一文がある。「周公欲弑莊王而立王子克。辛伯告王。遂與王殺周公黑肩。王子克奔燕。初、子儀有寵於桓王。桓王屬諸周公。辛伯諫曰、竝后、匹嫡、兩政、耦國、亂之本也。周公弗從。故及。」と。

注9、晋の献公の寵臣梁五と東閔五を指す。

注10、昭公三年に次のような一文がある。「昔、文襄之霸也、其務不煩諸侯。令諸侯三歲而聘、五歲而朝、有事而會、不協而盟、君薨、大夫弔、卿共葬事、夫人土弔、大夫送葬。足以昭禮命事謀闕而已。」

注11、昭公三年、この例5の伝文の後に、次の記事が続く、「齊侯使晏嬰請繼室於晉曰、寡君使嬰曰、寡人願事君、朝夕不倦、將奉質幣以無失時、則國家多

難、是以不獲。不腆先君之適、以備內官、焜耀寡人之望、則又無祿早世隕命、寡人失望。君若不忘先君之好、惠顧齊國、辱收寡人、微福於大公・丁公、照臨敝邑、鎮撫其社稷、則猶有先君之適及遺姑姊妹若而人。君若不棄敝邑、而辱使董振擇之、以備嬪嬙、寡人之望也。」と。

注12、哀公八年に次のような伝文がある。「齊悼公之來也、季康子以其妹妻之。即位而逆之。季鮒侯通焉。女言其情。弗敢與也。齊侯怒。夏、五月、齊鮑牧帥師伐我、取譚及闔。」(略)冬、十二月、齊人歸譚及闔、季姬嬖故也。」

注13、昭公八年の経文に、次の記事が並ぶ。「八年、春、陳侯之弟招殺陳世子偃師。」「夏、四月辛丑、陳侯溺卒。」「楚人執陳行人干徵師殺之。」「陳公子留奔鄭。」「陳人殺其大夫公子過。」「冬、十月壬午、楚師滅陳。」「執陳公子招、放之于越。」「殺陳公奭。」「葬陳哀公。」

注14、「陳乾昔寢疾。屬其兄弟、而命其子尊已曰、如我死、則必大爲我棺、使吾二婢子來我。陳乾昔死。其子曰、以殉葬非禮也、況又同棺乎。弗果殺。」(檀弓下第四)

注15、杜注によると「聲伯之母、叔肸之妻。不聘、無媒禮。」とする。

注16、杜注には「昆弟之妻相謂爲姒。穆姜、宣公夫人。宣公・叔肸、同母昆弟。」とするが、孔疏には「注、昆弟之妻相謂爲姒。正義曰、世人多疑、娣姒之名皆以爲兄妻呼弟妻爲娣、弟妻呼兄妻爲姒、因即惑於傳文。不知何以爲說。」として、本来は兄の妻が弟の妻を娣と呼び、弟の妻は兄の妻を姒と呼ぶ。声伯の母は弟嫁であって、娣と呼ばれるべきであるのに、ここでは姒といわないといっているのであるから、これは伝文の誤りではないかという矛盾を指摘しているのである。

注17、襄公二年に次の伝文がある。「夏、齊姜薨。初、穆姜使擇美櫝、以自爲櫝與頌琴。季文子取以葬。君子曰、非禮也。禮無所逆。婦養姑者也。虧姑以成婦、逆莫大焉。」(略)季孫於是爲不哲矣。」

注18、「秋、定姒薨。不殯于廟、無櫝、不虞。匠慶謂季文子曰、子爲正卿、而小君

之喪不成。不終君也。君長、誰受其咎。初、季孫爲己樹六櫝於蒲圃東門之外。匠慶請木。季孫曰、略。匠慶用蒲圃之櫝。季孫不御。君子曰、志所謂多行無禮、必自及也。其是之謂乎。」

注19、「齊侯歸、遇杞梁之妻於郊、使弔之。辭曰、殖之有罪、何辱命焉。若免於罪、猶有先人之敝廬在。下妾不得與郊弔。齊侯歸、弔諸其室。」なお、『禮記』檀弓下に「君於大夫、將葬、弔於宮。及出、命引之、三步則止。如是者三、君退。」とあって、国君の大夫への葬礼が記されており、遺体の安置されている場所に向いて弔問すべきものという。従って、ここでの齊侯の野外における弔問は、杞梁を庶民扱いしたことになるのであり、杞梁の妻は、これを非礼屈辱とした。

注20、『禮記』曲礼上に「取妻不取同姓。故買妾不知其姓、則卜之。鄭玄云爲其近禽獸也。」とする。

(おさき やすこ 人間文化学科)